

# K様の思いに寄り添う支援

## ◆キーワード

- 1 思いに寄り添う支援
- 2 オムツ体験
- 3 主役は利用者

～オムツ体験から学んだことを生かして～

徳島県	ふりがな 種別・施設名	ぐるーぷほーむ グループホーム	おやのいえ 親の家
-----	----------------	--------------------	--------------

ふりがな  
職種・発表者名：介護職員 上村佳乃子

共同研究者名：稲次正敬 稲次圭 稲次美樹子  
福富郁代 野崎美寿々 濱田広美 妹尾礼子

平成17年12月1日開設 2ユニット定員18名 併設事業所 小規模多機能ホーム親の家	(理念) 利用者は介護を受ける人ではなく生活の主役である。 利用者の心の動きに共感しありのままを受け止める。
--	--

### (取り組んだ課題・はじめに)

昨年親の家では「ご利用者の気持ちになる」を目的に職員のオムツ体験を行った。その結果、これまでの親の家の支援は職員目線の支援になってしまっていないか、ご利用者の思いに寄り添った支援になっていたのだろうかと改めて考えさせられた。その後のミーティングでも様々な意見があり、その中でK様はもっといろいろな事が出来るのではないかと必要以上に支援するところで出来る事を奪ってしまっているのではないかとこの意見があり、K様への支援の在り方を見直し、ご利用者の思いに寄り添った支援をする為いくつかの取り組みを実行した。

### (倫理的配慮)

研究発表に際し、ご利用者ご家族に承諾を得ている。

### (具体的な取り組み)

#### 【事例】

K様 90歳 女性 要介護5  
昨年5月入居され、入居当初は生活全般に介助が必要であった。発語もほとんどなく、コミュニケーションが図りづらかった。

オムツ体験から学んだこと、感じたこと、親の家の支援はK様の立場で考えた支援になっているか等を意見交換した。その中でK様の出来そうなこと、いつかこうなって欲しいと思うことを少しずつ取り組むことにした。食事介助しているとむせることが多くてしんどいだろう。食事はご自分で食べられるようになりたいだろう。紙パンツなんて履きたくないだろう。日中は上手くトイレ誘導をすれば布パンツでも大丈夫ではないか。いつか車椅子を自操して行きたい所へ行けるようになりたいだろう。このような思いを実現することを楽しみにしながら少しずつ取り組みを始めた。

#### ・食事の見直し

全介助→自助具のスプーン使用→スプーンと箸、両方を使用→箸使用

ミキサー食→刻み食→普通食

#### ・紙パンツから布パンツへの変更

トイレ誘導の時間は決めずK様の様子を注意深く観察したり水分摂取量等を考えながら、必要に応じて誘導する。

#### ・使用している車椅子の見直し

全身状態の改善が見られたため、少なからず車椅子を自操出来るのではと思います、自操タイプの車椅子に変更した。

#### (活動の成果と評価)

食事はミキサー食から普通食、自助具のスプーンを持って頂き手を添えて介助することにし、それを継続するうちに、食べこぼしはあるものの少しずつ自分でスプーンを口に運べるようになった。次に箸使用の練習の為、摂取するものによってスプーンと箸、両方を使用していただくようにした。それを継続するうちに箸も上手く使用できるようになった。現在は箸で自力摂取可能になった。排泄は終日紙パンツ使用していたが現在は日中は布パンツを使用している。トイレ誘導の時間は決めず、K様の様子「そわそわし始めた」「よく水分を摂取している」「何か言いたそうに職員を目で追っている」等ご利用者の言葉で伝えられない思いを職員が気づき誘導を行うことで布パンツの継続が出来ている。移動は車椅子で全介助であったが、自操タイプの車椅子に変更した所、始めは細かく操作方法を伝えなければならなかったが、日に日にスムーズに自操出来るようになった。その他に、今では日記を書くことを日課とされている。

#### (今後の課題・考察・まとめ)

職員全員でオムツ体験をし意見交換することで、これまでの支援を見直す良い機会となり職員の意識改革も出来た。職員目線の支援ではなく、ご利用者の思いに寄り添う支援をすることが重要であることに改めて気付いた。今後もご利用者の尊厳を大切に、ご利用者主役の親の家であり続けたい。

